

大後天樂瘦 人秋淨稻編或屋

全資刊戲樂行



第參回

新橋演舞場

親切感謝明る帝都

愛國百人一首

初春の初日かゞよふ神國の神のみかけをあふげもろもろ

荒木田久老

八束穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも

橘千蔭

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり

上田秋成

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ

栗田土満

遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみち葉

蒲生君平

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらずな

賀茂季鷹

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよ此の正道を

平田篤胤

一方に靡きそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける

香川景樹

安見しゝわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり

大倉鷺夫

かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや

藤田東湖

大阪 文樂座人形浄瑠璃芝居

吉例全員引越興行

第三回外題 (十一日より十五日まで)

糸仙人 吉野花王

吉野山の段

大阪地方海軍人事部指導

西亭謹作並作曲 大塚克三監
村田芳生照明

新作 水漬く屍

攝州合邦辻

合邦住家の段

一谷嫩軍記

熊谷物語の段
首實験の段

お染 新版歌祭文

野崎村の段



◇ 座 各 竹 松 の 月 七 ◇

明 治 座	東 京 劇 場	歌 舞 伎 座
<p>一 お目見得だんまり 一 幕</p> <p>二 赤穂義士審判 三 幕</p> <p>三 道行初音旅 常磐津連中 竹本連中</p> <p>四 東海道中膝栗毛 三 幕</p>	<p>一 幻燈部屋 三 幕</p> <p>二 上下五羽月の雫 長唄連中</p> <p>三 み民われら 三 幕</p>	<p>一 妹背山婦女庭訓 御殿の場</p> <p>二 素 袍 落 竹本連中</p> <p>三 一本刀土俵入 二 幕</p> <p>四 玉 屋 清元連中</p>
<p>七月興行大歌舞伎</p>	<p>藝術座水谷八重子一座</p> <p>日曜晝間興行十一時</p>	<p>恒例尾上菊五郎一座</p> <p>喜多村祿郎 加入 大谷友右衛門</p> <p>毎夕四時・日曜晝間興行十一時</p>
<p>一・二〇</p> <p>二・四〇</p> <p>四・〇〇</p> <p>七・六〇</p>	<p>一・二〇</p> <p>二・〇八</p> <p>三・六八</p> <p>六・六五</p>	<p>御 観 劇 料 (税 共)</p> <p>九・四〇</p> <p>六・七〇</p> <p>四・〇〇</p> <p>二・四〇</p> <p>一・一〇</p>

決戦下服装に就き 皆様へ御願ひ

今こそ決戦、一億總躍起の時、撃ちてしまひの氣概に燃へて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません。演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、隨て御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

従來、御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました。平時なら兎も角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様御集りの劇場ですから服装は格別目立つな服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娛樂を御覽下さいませう御願ひいたします。

新調は
見合せ
今後の衣
生活は
かうしま
しよろ

のでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るときへ云はれました、事實そうだったのであります。

だから今日御集り下さる皆様が服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召して、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも洵爛華美などと云ふ舊觀念を美事一蹴し、簡素、剛健、明朗

松竹株式會社

乍 憚 口 上

御ひるき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候 扱て當る七月興
行の儀は當場吉例により大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有
の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふことと相成り候
今度も大夫、三味線、人形遣全員上京致し名曲數々選擇の上豪壯華
麗なる配列をなし十分に古典の妙味を發揮致す事に苦心罷在候へば
必ずや御期待に添ひ得るものと確信仕候、何卒倍舊の御引立を以て
陸續御來場の上御批判御評判の程伏て奉懇願候

昭和十八年七月吉日

文 樂 座 敬白

昭和十八年七月一日初日

毎夕四時開演

外題五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御 觀 劇 料

- 一 等：(御一名)：七圓三十五錢(稅九割共)
- 二 等：(御一名)：四 圓(同六割共)
- 三 等：(御一名)：二圓四十錢(同)
- 三 階：(御一名)：一圓十錢(同四割共)

切符取扱所

銀座地下鐵街芝居切符賣場
電話銀座一八一七六九七〇
ブレイカイド各店取扱
銀座本店電話京橋(五〇一)一三まで

切符賣場用 電話銀座 七五七
事務所用 電話銀座 七五八
お客用 電話銀座 一九〇

木挽町

新橋演舞場

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちそうなことを、
簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織
とその由来——舞臺のこと——人形の
遣ひ方のこと——だいたい、そんな順
序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つ
の傳存劇團になつてしまつた。地方的
郷土的にはほかにもあるが、常設劇場
を有するものと云つてはない。けれど
も、文樂は寛政年度、おほよそ百五十
年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつ
て大阪に生れた劇場である。さうして、

この三四十年来、殆ど本邦唯一の人形
劇團なのであつて見れば、「文樂」が
「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうに
なつたのも當然でせう。古い所では、
江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝
居があつて、歌舞伎に對抗し、時とし
ては、享保から寶曆あたりまでは、つ
まり二百年前には、人形芝居のほうが
盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれ
る。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線
弾きと人形遣ひの三者によつて組織さ
れてゐるからである。ところで、この
三者は、初めから一緒に生れて發達し

て來たかといふに、さうではなかつた。
人形を遣ふといふこと、これはさう
つと古くからありました。記録にあら
はれた所では、遠く平安時代に傀儡子
(くぐつまはし)といふものが見える
傀儡子は、支那の西方、中央アジア地
方から漂遊して來た街頭演藝人であつ
たらしく、平安時代とあれば約一千年
の前のことにある。淨瑠璃は足利時代
中期の發生となつてゐるから、五百年
の歴史と云へるでせう。これに對して
三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港
に輸入された蛇皮線の本邦化なのであ
るから、ザツと三百七十八年前の舶來
樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提携し、慶長の初年あたりは、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピツタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これ

も歴史的に云ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載さ

れてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代の、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大坂

文楽座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない、絲繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該当する部分が二の手である。

二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の

場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひぱりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。

けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)



吉野山の段

衆仙人吉野花王

吉野山の段

花 衆 大 安

伴 曇

ツレ

増

竹本南部太夫
竹本伊達太夫

竹本七五三太夫

竹本濱太夫

竹本隅若太夫

豊竹松島太夫

鶴澤綱造

野澤喜左衛門

鶴澤重造

野澤松之輔

友花改メ
鶴澤燕三

野澤勝太郎

豊澤仙三郎

竹澤園作

これは寛保三年八月、豊竹座上演の爲永太夫兵衛作「衆仙人吉野櫻」全五段の内、その第五段目に當るもので、衆王子が仙術を以て神寶を奪ひ、龍神龍女を岩窟へ封じて、高位を得んと企んでゐたが美女花増の美しさに心を迷はせて其通力を失ふと云ふ一場で、寛保二年二月、市川海老藏等が大坂佐渡島長五郎座で演じた「雷神不動北山櫻」の鳴神上人墮落の場の作意を、そのまゝに取り入れたものと云はれてゐる。

梗概

衆仙人は大伴坊、安曇坊の弟子僧二人を従へ、秘法を修めて呪術を行ひ、人跡未踏の深山の岩屋に、龍神龍女を封じこめ、爲に一滴の雨も降らず、人

々は困つてゐた。

と、或る日のこと、都から花増と云ふ絶世の美女が、此の戒壇の邊りまで辿り上つて来た。

花増の美しさにうたれた仙人は、その素性を尋ねるのであつた。

女は、亡夫の四十九日に當る今日、夫の記念の小袖を洗ひ清めんため、麓では井戸の底まで水がかかれ、ただこの御山の瀧ばかり、何時も水が溢れてゐると聞いたので、遙々深山路を踏みわけて來たと答へた。

衆仙人は、物好きにも花増に向ひ、その亡夫との馴初めの話を語つて聞かせよと頼んだ。

人形

王 吉田玉市

坊 桐竹紋太郎

坊 吉田榮三郎

増 光之助改メ
吉田光造

花増はさすがに顔赤らめたが、纏て
甘い戀の思ひ出をめん／＼と語り出し
た。

話に夢中になつて聞き入つてゐた仙
人は、祭壇から思はず滑り落ちて氣絶
をして了つた。

併し、花増の手厚い介抱で、我れに
返る事が出来た。

そして次第に、花増の美しさに迷ひ
出し、種々とかき口説き、果ては夫婦
固めの盃まで交すことになつた。

弟子僧二人を、無理に麓へ使ひに出
した仙人は、花増の酌で盃の數を重
ねてゐたが、遂にとろ／＼酔ひつづれ

て、果ては花増の尋ねるままに、問は
れるままに、呪術の祕法まで打明けて
其場に正體もなく眠つて了つた。

好機は今と、花増は壇に張り廻され
た注連繩を切り拂つた。

と、忽ち豪雨沛然として降り來たつ

て祕法はここに破れたのである。

◇ (佐 和 利) ◇

花増嬉しく、ムムすりや其神寶はあ
の宮の内納つてあるかへ、そふしてマ
ア春でもないのに今をさかりのアノ櫻
の花はへ、ふしぎなは道理あれは吉野
の山櫻爰へ取寄せ時ならぬ花を咲すも
我が行力、麓へさがりし後にて、もし
太子方の者共が神寶を心がけよぢ上ら
んとする時は忽ち櫻が飛び散て花物云
はねど告げしらす、何ときつい要害か
眞になア、それ程自由な事ならば今で
も雨を降そふと儘かへ、チアあのはう
たる注連を切拂へば龍神飛び去り雨を
降らすと云ふ中もふら／＼眠ればサア
呑まんせ……

竹本織太夫

竹澤團六

ツ

野澤勝太郎

レ

胡

野澤勝太郎

弓

野澤錦糸

人形

權 爺 吉田玉市

青年 太市 桐竹紋太郎

母 さく 吉田小兵吉

上田定二等兵曹 光之助改メ 吉田光造

横山海軍中尉 吉田玉助

父市右衛門 桐竹門造

大阪地方海軍人事都指導

西亭謹作・並作曲 大塚克三裝監 村田芳正照明

水漬

(床本)

普天の下、率土の濱、何れか皇徳に浴せんや、皇土に生ゆる草も木も、育ぐむは露を菊の花、道一筋や川迫村、里も豊かに稔る穂の、御代もゆるかの道の邊を秋の野風に吹き流れ、いづこに聲や在郷歌、兄サ御楯よ、親たちや畑よ、ともに務めじや御國の爲じや、赤い手がらの花嫁さんも、聲さ御楯に山田守る、ほんさのんえ。ヲヲ權爺どん、えらく精さ出しなはるのふ、アア太市どんけ、お前マア洋服さ着て何處行きけ、ウン今日日は、アノ日野山の城跡サで分會の教練が有つたで一ッ走

屍 一幕三場

り行て今歸りじやげに、ホウさふけ、そりやハア御國の爲に、若いもん達じや御苦勞ちやの、そりやそふと、上田の定どんが歸つて居るがお前ア會ふたけ、ウン會ふた、ありやまあ感心なもんぢやの、たまの休みに歸つてもハア休みもせず、がせえにおつ母の手助け之れ之の秋祭も待たずに、もふ歸るげなが。ウンあん人ア孝行もんぢやよ、昨日ア野良着きての、畑サ行くんぢやつて、今朝また軍服での墓参りの歸りぢやつて、村方の人にもよろしふつての中々感心なもんぢや。そふぢやけ、また、あのおつ母アもがせえもんのヲ。ほんさ、この親にしてこの子有りです

がの。そげえなむつかし事ア解らんが
マア何にしても若いもんナ見習ふ事ッ
ぢや、イヤ、若いもんの事よりや
おらも精さ出して、この親とやらとほ
めてもろふけ。イヤ、種爺どもも、
年サいかして、若いもんにも負けずに、
村の者ア皆感心しとるけん。エーイお
だてるでねえ、ハハ…ンナラ太市ど
ん、また晩に話そけえ。ン權爺どん、
足元サ氣付けて行かつせいよ。ウン、
有りがと。老若若きもなごやかな、
道は分れど一筋に、我家々々え歸るさ
の。何れ其時きや白木の箱よ、又の逢
ふ日を九段坂。其九ツの御柱と、知る
由もなき母親を、連れ立ち行くも終り
ぞと、心の定二等兵、顔にも出さず秋
晴れの、野面にほころぶ稲の穂も、笑顔
で渡る可愛川、樂し團欒の一つ道。お
つ母さん、よい景色ですなア。さふか
のふ、わしやいつも通るげに、そふも

思はんが、お前アまたまに歸つてぢや
けそかも見えるんぢやよ。イヤ、いつ
も變らぬこの眺めも、今日は別して美
しく想ひます。アノ日野山の城跡、可
愛川の流れ、子供の時分は、あの城跡
まで蜻蛉つりと行つたり、可愛川では
石遊びしたり、おつ母さん、随分御苦
勞かけましたナア。なにを定、思ひ出
した様に、なんげ、しかしのふ定、お
前も今は日本の海軍さんじやけに、天
子様やお國の爲、立派な務め忘れん様
にの、そして又、方々の國々の人さも
寄つてぢやらふに、お友達にも憎まれ
ん様にのふ、ハイ、おつ母さん、御教
訓はしつかりと、決して、決して忘れ
は致しません。ほんさ、もう會はれん
かの様にの、ハ、ハ、女はこせつくだ
のふ、氣んすなよ、病氣さアせん様に
の。ハイ、おつ母さんも御無理をして
お體をそこなはぬ様お氣を付けて下さ

い。ン、おつ母アまだ、丈夫ぢや
けに、内の事ア心配せず、御奉公サ大
事に、立派な兵隊さんになつておくれ
よ、もしかの時は人様に笑はれん様に
の、お父つさんもそれを云ふてぢやけ。
ハイ、お父さんにも宜敷く申し上げて
下さい、それから、これはお父つさん
に渡して置くと思ひましたが、弟や
妹に菓子でも買つてやつて下さい。
お前エ、そんな事せんがええ、お前も
何かというげに。いえ、僕はよろし
いんです。そんな事、イエ、心配せ
ざにどふか。なにけ。イヤ、ナナ何ん
でもありません。それではおつ母さん
いつまで送つて頂いてもお名残りが盡
きません。これで征きます。そふけ、
もつと送つてやりてえがの、夕餉のこ
しらえも有るげに、ナラこれでいま
すけ、折角の休みに樂もさせいで働か
してばかしすまなかつたのふ。勿體な

いおつ母さん、人の子として當然の事
 であります。それから、これは鎮守
 様のお守りぢやで、粗末にせん様に體
 へつけんさい。ハイ、いろ／＼お心づ
 かひ、有難ふございます、それではお
 つ母さん。氣を付けての。此所は川追、
 向ふは日野山、申を流れる可愛川。見
 送る暈、一時雨、野分の風に吹き分か
 れ消ゆる姿に伏し拜む心ぞ消き眞珠灣。

珠と砕け花と散る今ぞ歸らぬ我心、
 堅く秘めたる奥底も誰にか岩佐海軍大
 尉、頭に頂く諸勇士の盡忠報國秋ぞ今
 門出を前に九勇士、中に横山海軍中尉
 上田二等兵曹と共に語る夜の空流れて
 走る星、一つ。上田。ハイ、見たか今
 のアノ流星を、あの星の飛び行く方こ
 そ我々の征く所だ。岩佐大尉を始め、
 皆々今回の企圖も今日ある日を期した
 が爲だ、とう／＼其秋が來たのだ。ハ

イツ、そウです、これ程最大の喜びは
 ありません、先刻も岩佐大尉より訓示
 を頂きました、萬全を期してやります、
 何が何でも必ずやり抜きます、先程片
 山二等兵曹が、あくる日のルーズベル
 トの泣き言を俺も聞いたぞ閣魔の前で
 とやつて居りました、想ふても痛快で
 す。ウム、皆々苦勞の仕甲斐があつた
 と云ふものだよ、が、想へば永い間苦
 勞をかけたなア、よく面倒を見てくれ
 た改めて禮を云ひます。滅相もない、
 至らぬ自分を、これまでの御訓育、今
 また此の名譽ある壯舉にお伴が叶ひ、上
 田、此上の喜びはありません。ウム、
 よく云つて呉た、併し乍ら君達の家族
 に對しては、實に氣の毒に思ふてゐる。
 御言葉恐縮に存じます、が、軍人の家
 族としては如何なる人も、一旦緩急の
 場合御國に殉ずる事に至高の名譽、こ
 れに過ぐるはなく、我日本人である限

り誰しも喜ぶ事と存じます、私も過日
 歸省の際、両親より云はれました、我
 子にして我子でない、大君に捧げ奉つ
 たお前だから、一朝有事の際は、立派
 な帝國軍人として人後に落ちず、笑は
 れぬ様にと、横山中尉、不肖の上田に
 も親は過ぎたる者でございます、イヤ
 コレハ、子として親の自慢話、どうか
 お聞き流しを願ひます。イヤ、そふで
 ない、立派な両親だ、僕にも父には死
 別したが猶母がある、強い、そして優
 しい母だ、上田、見えるか、これが母
 だ、想えば今日まで皇恩の萬分の一に
 も報ひ奉る事もなく、又二十三年の母
 の慈悲に對し、充分の孝養を盡し得な
 んだ、お母さん、今日こそ横山中尉、
 死所を得て醜の御楯と散り、皇恩の萬
 分に報ひ奉りますなれば總てを御寛容
 願ひます、これが私の孝の始めであり
 又終りでもあります、お母さん、どう

か御壯健でも心の内在すが如き寫し繪の母の面に浮く笑顔、孝は忠たり一道の心を想ひ上田も亦、取り出す包み土の香に、父母の情の重き艦、輕き命の捨て處。上田、何だそれは。ハイ、土

でありませす。何、土。ハイッ、自分は農家に育ち、土は一入懐しく思ひます稲垣二等兵曹も今度歸郷の時、祖先の墳墓の土を持つて歸りました、思ひは同じだらうと存じます、此土には、父の情もあり、母の愛もこもつて居ります、此度の事、何處に於て散りますとも、此日本の土の香は永久に、八紘一字の御精神と在りませふ。上田ッ。ハイ。床しい、美しい心だ、それでこそ帝國軍人だ、其皇徳に浴せんこそ、我々の念願だ、萬全を期してぬかりなく。ハイッ、必ずやりとげます、死しても尙止まざる心です。ウム、互ひに心を清め、皇恩に報ひ奉らふ、今宵、最後

の故國の空、別れに望み、皇居に向ひ奉り、聖壽の萬歳を壽きまつる、氣をつけッ。

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍大君の、爲には何ぞ命をや、何惜しからぬ軍人、香りも床し梅の花、一片散るや君に忠、二片散るや父母に孝、散りにし後そ結ぶ實の、家門の譽れ過ぐる日の幼妻の偲ばるる、誰が口ずさむか子守唄、ねんねろよ、ねんねろよねんねの子守はどこサ行た、お湯洗ひに里さ行た、里サおごふに何もろた、宮崎杓子に貝細工、定、よくやつて呉たのふ、お父つさんも、おつ母もお前の戦死の知らせを聞いた時きや、どげえ嬉しかつたか、聞きや、此墓の土を持つて行つたそそうなげ、其時から戦死の覺悟で居たんぢやのふ、今から思へば、弟や妹に土産サ呉た時、紙包か

ら土がこぼれた様に思ふただ、此土であつたんぢやのふ、よく持つて居てくれたのふ、おつ母ア、目出でえ、定の戦死の奉告ぢやけ、泪サ、出すなよ。天子様のお爲ぢやもん、悲しかねえが、つい、つい、嬉しふての、勘忍して下つせ、定や、何れ靖國サアへ、逢ひに行くけにの。サアモウそろくお天道様の上らつしやる頃ぢや、二人で拜んで歸ろけ。ハイ。悲し泪は出さねども嬉し泪に明けの鐘、寂滅爲樂と響くとも、聞いて驚く人もなし、梅は散りても實はみのる、鳥は古巢へ歸れども。

が。ウム、驚も泣いて呉るか。征きて歸らぬ死出の海、泣くな歡な必ず歸る、桐の小箱に錦の衣、逢ふは九段の坂の上、雲なく晴て、軍神還らぬ五艇、九勇士の、其名特別攻撃隊、登る旭の御光に、譽れは世々に輝きぬ、譽れは世々に輝かん。

攝州合邦辻

合邦住家の段

解説

「攝州合邦辻」は安永二年二月、大阪北堀江座の勾欄に初演された淨瑠璃で、作者は菅事助、若竹笛躬の兩人であります。

- 竹本 雛太夫
豊竹つばめ太夫
鶴澤友衛門
豊竹古靱太夫
鶴澤清六

全編中この下の巻は、中々巧く書かれて居ります上に、筋付も器用に面白く出来て居ります爲か、今猶ほ非常な流行を見て居る次第であります。

この淨瑠璃が謡曲の「弱法師」に由来して居ることは何方も御承知かと思ひますが弱法師の傳説は、謡曲に入る一方、説經の「しんとく丸」として世に廣まり、古淨瑠璃に於ても是を轉用して語つて居ります。

此の説經系統の古淨瑠璃「しんとく丸」に謡曲の「弱法師」の構想と詞章を取入れて作つたのが、初代竹本義太夫の正本「弱法師」で「合邦辻」はこれを根幹として成り立したことは明かでありませう。

「弱法師」の物語は何れも、繼母の讒言により追放され辛苦する高安左衛門の一人俄徳丸の運命を描き、遂に攝津の天王寺に於ける父の旅行満願の日に父左衛門に邂逅

一段の趣向として嘘にもせよ繼母が義子に戀すると云ふ、骨肉の戀の主題とした異つた作柄である爲、大正十四年豊竹古靱太夫が、御靈文樂座で復活上演するまで、永らくその筋から上場を禁じられて居りました。

合邦住家の段

中

切

人形

親合邦吉田榮三

合邦女房桐竹政龜

玉手御前吉田文五郎

奴入平吉田玉徳

俊徳丸桐竹紋司

浅香姫桐竹紋太郎

町人大ぜい

つて求ばれると云ふのが大體の骨子になつて居り、「合邦辻」の異色特色であり、極めて大切な想になつて居る骨肉の戀、繼母と義子の戀と云ふ筋立てには觸れて居りません。

年若い繼母がさ程年の違はぬ美しい義子に戀をし、それが悲劇の動機となる、と云ふ主題は、實に古く説教の「愛護若」と云ふ物語に扱はれたもので「合邦辻」の趣向もこの邊から系統を引いて居るのであります。

この段中、殊に心を引かれますのは、切になり、しめやかに物淋しく語り出される「しん／＼たる夜の道」から、とぼ／＼と玉手の出になるあの透りの夜更の情調であります。無言の老人夫婦が娘の亡き魂を叩き、華やかな色彩の無い沈んだ舞臺面だけに、淨瑠璃獨特の云ひ知れぬ詩情を湛へるのであります。

母に玉手が自分の戀を打明ける條、又俊徳丸に色氣を見せる條など、ハラでは十分愁を含んで、表面では艶かしく見せると云

ふ皮肉な語り物だけに、その演出の解釋に色々と工夫がある譯であります。

又、玉手の「苦しき片頬に笑ひ顔」の一條など讀んで字く如く至難な個所かと思ひます。人形の演技も、玉手が母に無理やりに納戸へ連れられて行くくだり、又「嫉妬の亂行」のあたり、其他人形劇獨特の妙味が各所に發見されることであります。

梗概

合邦住家の段

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衛門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。

所が如何なる天魔が魅つたのか、義理ある先妻腹の子俊徳丸に想ひを寄せ何かと云ひ寄るので、俊徳丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の浅香姫と手

をたづさへ玉手の親の合邦の庵室へと身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尙も俊徳丸の後を慕つて合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひ、どうしても門側も踏せぬと、内に入れてやうともしなかつた。然し遠に母は女の身の心弱さから、玉手を幽霊と云ふ事にして、幽霊ならば入れても仔細はありませんまいと合邦を説き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね、女夫にして下され」とかき口説くあり様なので、合邦は今更の様に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歴とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必ず娘に思ひ切らせて見せますと、玉手を無理に奥の一間へ連れて行つた。折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつたが、フト玉手の姿を見つけて、様子をうかぶはんと傍に身を忍ばせて居たが、一間から兩眼盲た俊徳丸が、淺香姫に手を取られて、なよなよと現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念くつきまゝとふ上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかし、と既に伴ひ出やうとした。その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り縋り入平の意見の言葉も耳に入らず、又しても切ない戀をうつたへるのだつた。これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に惱みながらも「是には深い様子のあること」と自分の苦

衷を物語つた。それは、高安の妾腹次郎丸が奸臣坪井平馬と心を合せ、己が家督を繼がんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ毒酒に形相を變へさせたのも、御家督さへお震ぎなくばお命に別状なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、かうしてお後を慕ひ参つたのは、此の病を本復させるため、と云ひつゝ手にする鮑貝を出して、寅の年月揃つた我が血汐を盛つて俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。その時にはもう玉手の知死期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の殊數の輪の中で、一同に見守られつゝ大往生を遂げた玉手御前であつた。

熊谷物語の段

一 谷 嫩 軍 記

熊谷物語の段
首 實 驗 の 段

首 實 驗 の 段

切

人 形

妻 相 模	桐 竹 紋 十 郎
熊 谷 次 郎 直 實	吉 田 玉 助
堤 軍 次	桐 竹 紋 司
藤 の 方	吉 田 小 兵 吉
源 義 經	吉 田 榮 三 郎
梶 原 平 次 景 高	吉 田 多 三 郎
石 屋 彌 陀 六	桐 竹 門 造

竹本相生太夫
野澤吉五郎
豊竹呂太夫
豊澤仙糸

竹本大隅太夫

鶴澤清二郎

『一谷嫩軍記』は全五段よりなる淨瑠璃で、淨瑠璃中でも名作の一つに數へられて居ますが、殊に此度上演の『熊谷陣屋の段』は最も有名で、全五段中での眼目となつて居ます。

是が始めて豊竹座に出したのは寶曆元年十二月で、並木宗輔は初段、二段目と此の三段目陣屋の段計を書いて歿しましたので、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三等が増補して後の二段を書いたと傳へられて居ます。

尙此作は享保十五年十一月竹本座に上演された文耕堂、長谷川千四の合作になる『須磨都源平躑躅』に負う所が少くないと云はれて居ます。江戸の歌舞伎に始めて上演されたのは明和元年市村座の額見世であります。

左に簡単に解説を附して置きます。先にも記しました様に此の淨瑠璃は、全五段からなつて居ますが、序の口は堀川御所で、此所で義経は熊谷直實と岡部の六彌太を招き、六彌太に向つて、平忠度の名歌「さざ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」は、歌集、千載集に入れられる事にはなつたが、作者忠度は今勅勘の身であるから、懺と敵人知らずとして載せ置いたと語つて、短冊を結び付けた櫻の枝をとつて、これを忠度に渡せと命じます。一方直實には「一枝を伐らば一指を剪るべし」と辨慶の書いた制札を與へて、即ち一谷に攻め入るとも必ず平家の公達を救ひまいらせよとの意味を含めます。即ち、陣屋の櫻の木の下に立ててあるのが此制札で、此制札が、今度上演の熊谷陣屋では、非常に重要な役割を勤めてゐます。

花の盛りの敦盛を討つて無常を悟つた熊谷が、重い心を抱いて陣屋に歸れば其所には思ひもかけぬ妻の相模が、夫の安否我が子の様子を氣にかけて、武藏の國から百里の道を遙々と、訪ねて来て居た。熊谷は陣門に勝手のおれを、一旦は厳しく叱るが、小次郎の比類なき働きや、敦盛の首級を擧げた自分の手柄話を聞かせてやるのだつた。

これより先に、平經盛の奥方藤の方は落人の身を、熊谷の妻相模に隠まはれ、又、我が子敦盛の敵討ちの助太刀をも、相模に頼んで置いたが、今の熊谷の話を耳にして、突如「我が子の敵」と、熊谷に斬つて掛つた。

熊谷は、此の意外な見參に驚きながらも、藤の方を上座に直して須磨の浦邊に敦盛を討ち取つた次第を委しく物語り、戰場の常と藤の方を慰める。折柄家來を從へて義經が出座するので、

熊谷は此所に始めて、敦盛の身替りにした我が子の首を質檢に具へ、「一枝を伐らば一指を剪る」との制札の意を察して、よくぞ討つたとお褒めの言葉に預るが、貝鐘の音高く聞へるので再び出陣の用意にと、一間の中に這入つた。

と、此の時梶原が「義經熊谷心を合せ、敦盛を助けし段々鎌倉殿へ注進する」と呼ばはりながら駆け出したが、折柄飛び來つた手裏劍の石鑿に打たれて、梶原は其場に急絶へて了つた。

梶原を討ち果したのは、御影の里の石屋、彌陀六の仕業で、その彌陀六は「邪魔になる木葉は、捨てて上げました」と、其儘行き過が様とすると、義經は彌陀六を、其昔命を助けられた彌兵衛宗清と見破つて、呼び留めた。始めは彌陀六も白をきるが、義經の慧眼を欺き切れず、遂に本名を名乗つ

た。然し自分の助けた頼朝義經故に、今日の平家の没落を恨み怒り、獅子心中の虫とは我が事と、悲憤の泪に咽ぶのだつた。が、娘へ届けて呉れと義經に渡された鎧櫃の中に、敦盛在りと知つてその情を知つた。

一方、相模は、我が子小次郎直家こそ敦盛に代つて死んだのかと、遺母子の堪りかね、悲歎の泪にかきくれるのを、藤の方も其心を察して、共に泣いた。

義經は、西國出陣の時うつる、用意如何にと熊谷を促すと、甲冑姿で現はれた熊谷が、それを脱ぎ捨てれば、墨染の衣に頭も青い道心の姿に變つてる。そして驚く妻を制し、義經から暇を賜はるままに、向ふは西方彌陀の國黒谷の上人を師と頼まんと、只一人黒谷へと――。

野崎村の段

新版歌祭文

親 久 作

竹本相生太夫

娘 お 光

竹本南部太夫
竹本伊達太夫

娘 お 染

呂賀太夫改メ
豊竹松太夫

丁 稚 久 松

豊竹宮太夫
竹本越名太夫

母 お 勝

豊竹千駒太夫
竹本隅若太夫

下 女 お よ し

豊竹宮太夫
竹本越名太夫

鶴澤觀西翁

疎々たる枝に初梅の、花咲く村の春景色。娘お光は氣もいそぐ、日頃の願ひが叶つて久松と女夫になれるのも、天神様や觀音様、第一は親のお陰こんな事なら今朝あたり、髪を結ふて置かうもの、鐵槌の付けやう挨拶も、どう云ふて能かろやら……と落着かず勝手から組板や庖丁を持出して、祝言の用意の膾大根をちよきく刻み出した。

と、久松の跡を慕ふて、下女およしを連れて来た油屋の娘お染が、船の上り場で教へられた梅を目當てに久作の家を探し當て、下女を戻すと立寄る門口、今日大阪から久松と云ふ人が戻つて見えた筈、ちよつと逢はせて下さんせ……と言ふ。

其の聲聞くと、思ひ當る節のあるお光、組板押し遣り昵々と戸外を覗いて管氣の初物、何ぢや、久松さんに逢はせて呉れ、そんなお方はこちや知らぬと膠もない腹立ち聲。

其の様子がお染は腑に落ちず、ふと思ひ付いて土産代りに絹紗包みの香箱を差出すと、こりや何ぢやえ、大所の御寮人様、様々々と云はれても、心が至らぬ惜かしやんせ、在所の女子と侮つてか、欲しくばお前に遣るわいなあ

染

は

船

松

堤

- 竹本相生太夫
- 豊竹呂太夫
- 竹本南都太夫
- 竹本伊達太夫
- 竹本雛太夫
- 豊竹つばめ太夫
- 竹本濱太夫
- 豊竹千駒太夫
- 竹本隅若太夫
- 豊竹松島太夫
- 竹本七五三太夫
- 豊澤仙糸
- 野澤吉五郎
- 野澤喜左衛門
- 鶴澤重造
- 鶴澤友衛門
- 豊澤園伊三
- 鶴澤燕三
- 野澤勝太郎
- 豊澤仙三郎
- 野澤錦糸
- 竹澤園作
- 鶴澤清廣

と、香箱投げ付け、門びつしやり。

其處へ久松連れて出る久作、久松に

肩を揉ませ、お光には炙を點えさせる

が、お染の門に居るのを氣付いた久松

の、折が悪いと目顔で止めるのが、お

光には又妬ましく、諍ひを始め、夢中

になつた揚句は、久作の頭へ炙を點え

る始末、其れを久作が仲裁して、仲直

しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり

鐵漿も付けたり、湯も使ふて花嫁御、

作つて置けと打笑ひ、お光を連れて納

戸へ入る。其間遅しとお染は駆入り、

山家屋へ嫁入せいと胸慾ぢや、其方

は思切る氣でも、わしや何ほでも得切

られぬと掻口説き、用意の剃刀で自害

しやうとするので、久松も所詮は深い

悪縁と思ひ、お染の手を執つて泣き悲

しむ。

始終を立聽いた久作が出て、久松は

實の子で無く、二本差す家柄に生まれ

たのを、妹が乳母で有つた關係から引

取つて養つた事から、智恵付けの爲に

油屋へ下稚奉公に出した事を語り、親

方の恩も義理も辨へず、嫁入りの極まつ

たお主の娘を唆かす久松を責め、又、

お夏清十郎の昔語りに擬え、二人の不

心得を懇ろに誠め、理を盡して別れる

様に合點させると、只聞き入れたとの

返辭を喜んでお光を呼出し、祝言さし

よと綿帽子を脱れば、島田髻が根元か

ら切つてあつた。事の意外に皆なが驚

くのをお光は押えて、お二人が思ひ切

つたと云ふは表向、底の心はお二人な

がら、死ぬる覺悟と知つた故、何うぞ

お命取止めたさ、わしや最うと思

ひ切つた、さあ、切つて祝うた髮容：

人形

娘	お	光	桐竹紋十郎
娘	お	染	桐竹龜松
下女	お	よし	吉田玉男
親	久	作	桐竹政龜
丁稚	久	松	吉田榮三郎
母	お	勝	吉田玉徳
船頭	竹	松	吉田兵次
鶴	か	き	大ぜい

：と兩肌脱げば、下着は白無垢、首には五條袈裟をかけて居る。

玉より清き真心に、今更ら何と言葉さへ、久松お染が面目なさに、自害しやうとするを久作は止め、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出来したと云ふ心の中、思ひやりが有るなれば何故承らへては下さらぬ：と二人を諫めて合點させ、嘸ぞ母御様が案じてござらう、大事な娘御、誰か確な者に送らせ度いものぢやと、久作が案する折、油屋の後家お勝が入つて來た。

様子を殘らず表で立聽き、久作の深切、お光の志しを心で拜んで居たお勝は、二人に禮を述べ、改めて尼御へ布施、久松が取られた金を恵み、而して世上の補ひ心の遠慮から、駕で堤を大阪へ戻る久松とは別れくに、お染を

連れて船で戻る事にする。

舞臺は廻つて裏手になる。

大阪へ戻る人達を送つて來た久作お光は、別れの詞を交し合ふと、駕で堤を行く久松、船で川を行くお勝とお染の跡を寂しく見送り、へ縁を引綱一すぢに、思合ふたる戀仲も、義理の柵み情のかせ杭、竹輿に比翼を引わくる、心ごころぞ：でお光は久作の手を引ひて家の方へ。



新橋演舞座席表

The floor plan shows a theater with a stage at the top. The seating is arranged in several sections, with seats numbered in a grid pattern. The numbers are organized into rows and columns, with some sections having their own sub-headers. The theater has two exits marked with a circular logo at the top and bottom. The text '新橋演舞座席表' is written vertically on the right side of the plan.

昭和十八年六月廿八日印刷
 編輯部
 一四二

ミツワ 肝油 スプロド



一家総ばりギリ

無病息災

戦場は吾々の身近かに續いております。最後の勝利を

確保する迄、一億同胞みな健康であらねばなりません。増産に挺身する人も勉學する人も、家庭を護る人も、こぞつて張り切つた生活をいたしませう。

不足しがちな栄養を総合的に攝取する必要があります。本劑は各種の營養素を多角的に

含有し且つ完全乳化してありますから胃腸障害を起す心配もなく吸収いたします。

毎日一顆——二顆

ミツワ 石鹼本舗薬品部

許特賣專

ラオゼ

磨齒用薬



生活の
科學化は
手近から

私共の生活に科學性を取り入れる事は、最も必要な事です。徒らに遠大な物を希まづとも、まづ最も身近にあるものから心がけるべきで、例へば、朝に夕に私共の生活に且親しまれてゐる齒磨の科學化こそ手近で且つ有効的です。

主劑ゼオライトの持つ吸着・置換・收斂の三大科學作用は豫防齒科醫學多年研究の所産であり、齲齒の所産で完全豫防齒槽膿漏の完全預防と同時に、歯根の強化を圖り、咀嚼力を強化いたします。

こんなお方は、せひゼオラを、

- 1 齒を強く美しくと望む方
- 2 林檎を噛むと血の出る方
- 3 齒刷牙を使ふと血の出る方
- 4 むし齒が多くて御困りの方
- 5 咀嚼力が不充分で困る方
- 6 在來品に御不満の方

共税 廿八錢

定價部金貳拾錢

部品藥舖本廠石ワツミ